

原著

## 日本語版動物への共感性尺度の作成

野瀬 出\*

日本獣医生命科学大学 比較発達心理学分野

(2026年3月3日受付/2026年5月12日受理)

## Development of a Japanese Version of the Empathy Toward Animals Scale

NOSE Izuru\*

Laboratory of Comparative Developmental Psychology, Nippon Veterinary and Life Science University

(Received March 3, 2026/Accepted May 12, 2026)

**Abstract** : The Empathy Toward Animals scale (ETA), developed by Dias Martins et al. (2025), is designed to assess two dimensions of empathy toward animals: empathic concern and perspective taking. This study aimed to develop a Japanese version of the ETA (ETA-J) and examine its reliability and validity. The participants were adults aged 20–65 years residing in Japan. The data were collected through an online survey. In addition to the ETA-J, participants completed the following items: the Interpersonal Reactivity Index, the Typology of Attitudes Toward Animals, and the Psychological Scale of Anthropomorphism. They also answered questions about their experience of owning animals and participation in animal-related volunteer activities, donations to animal protection causes, attitudes toward the culling of captured stray dogs and bears, and degree of affinity for animals. Confirmatory factor analysis supported the same two-factor structure as was reported in the original study. Test-retest reliability was adequate, as were construct and criterion-related validity. These findings suggest that the ETA-J can be used to assess participant suitability and measure the effectiveness of implementing animal-assisted interventions that consider animal welfare.

Key words : empathy toward animals, psychological scale, reliability, validity

*J. Anim. Edu. Ther.* 17: 11–18, 2026

### 緒言

本研究は、日本語版動物への共感性尺度を開発することを目的としている。これまで動物への共感性尺度は、ヒトに対する共感性尺度をベースにして作成されてきた。現在、ヒトへの共感性は多次的に捉えることが一般的となっており、その代表的な尺度として対人反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index: IRI; Davis 1983) があげられる。IRIでは共感性を、共感的関心、視点取得、個人的苦痛、ファンタジーの4つの下位尺度によって測定する。共感的関心 (Emotional Concern: EC) とは困っている他者に対し

て同情や思いやりを感じる感情的な傾向である。視点取得 (Perspective Taking: PT) とは他者の立場に立って考える認知的側面における能力を指す。個人的苦痛 (Personal Distress: PD) は他者の不運を見て自分自身が不安や不快を感じることであり、ファンタジー (Fantasy Scale: FS) は小説や映画等の架空のキャラクターの感情や行動に自分自身を投影する傾向である。ECとPDが感情的側面、PTとFSが認知的側面を反映しており、特に、ECは向社会的行動や利他的行動の促進に影響していることが示されている (Edele et al. 2013; Kamas and Preston 2021)。

\*連絡先: inose@nvl.u.ac.jp (〒180-8601 東京都武蔵野市境南町1-7-1 日本獣医生命科学大学 比較発達心理学分野)

一方、動物への共感性に関しては、動物保護に影響を及ぼしている可能性が報告されている。Swim et al. (2023) は伴侶動物に対して共感性を示しやすい人ほど、その動物を助けるために多くの寄付金を支払う意欲があることを報告している。Smith et al. (2024) は、イルカの個体識別能力が高い人ほど、負傷したイルカに高い共感性を示し、海洋動物を助けるための行動をとる傾向があることを示した。寄付金については個体識別能力が高いほど減少していたが、負傷した個体のエピソードや写真をセットで提示すると寄付額は増加した。また、ヒトへの共感性が高いほど、負傷したイルカに共感的であった。Faner et al. (2024) は、ペットへの愛着が強い人ほど、動物に対する共感性が高く、それがヒトに対する向社会的態度の促進に寄与していることを報告している。動物への共感性は動物福祉や保護活動において重要であるが、動物との相互作用を通じてヒトに心理・社会的効果をもたらす動物介入介入においても関連する心理特性である可能性がある。

動物への共感性の程度を正確に把握するためには、それを測定するための尺度が必要である。Paul (2000) は、ヒトの感情的共感性を測る Questionnaire Measure of Emotional Empathy (Mehrabian and Epstein 1972) の項目を動物向けに変更し、Animal Empathy Scale を作成している。ヒト用と動物用の共感性尺度間について検討した結果、両者の間には弱い関連性しか認められず、関連性はあるものの異なる構成概念である可能性が示唆された。ただし、この研究で用いられた Animal Empathy Scale は、主に共感性の感情的側面に焦点が当てられており、認知的側面は十分に捉えられていなかった。

Powell (2010) は動物に対する共感性を測定するため、動物への共感性尺度 (Empathy Toward Animals scale: ETA) を開発している。ETA は Davis (1983) の IRI をベースにしており、IRI の質問項目を動物用に転用することで ETA を作成した。IRI の 4 つの下位尺度の内、EC (7 項目) と PT (5 項目) の 2 因子から構成される。クロンバックの  $\alpha$  係数により信頼性を確認するとともに、Animal Attitude Scale (Herzog et al. 1991) との関係や、動物の保護活動意欲 (関連法案への支持、署名活動、保護犬の迎え入れ) との関係を検討することで基準関連妥当性について確認している。

Powell (2010) の作成した ETA については因子分析を実施しておらず、構成概念妥当性の検討が不十分であった。そこで、Dias Martins et al. (2025) は探索的および確認的因子分析による因子妥当性の確認、複数の外的基準 (ヒトへの共感性尺度、思いやり尺

度、動物への態度尺度等) との関連を検討することで構成概念妥当性および基準関連妥当性を確認している。その結果、オリジナルの ETA から 2 項目が除外され、EC6 項目、PT4 項目、計 10 項目から構成される ETA が完成した。

動物への共感性を測定することは有益であると考えられるが、現時点において日本語で測定可能な尺度はなく、新たに作成する必要がある。本研究では、Dias Martins et al. (2025) が作成した ETA の日本語版 (Japanese version of the Empathy Toward Animals scale: ETA-J) を開発し、その信頼性および妥当性について確認することを目的とする。信頼性については、クロンバックの  $\alpha$  係数により内的整合性を検討するとともに、再検査法による信頼性の確認も実施する。妥当性については、IRI-J (日道他 2017) や日本語版擬人化尺度 (上出他 2017)、動物に対する態度類型 (石田他 2004) との関係から構成概念妥当性 (収束的妥当性) について検討し、動物の飼育経験、動物ボランティアへの参加経験、動物保護活動への寄付経験、捕獲された野犬や熊の殺処分に対する態度、動物好きの程度との関連から基準関連妥当性 (併存的妥当性) について検討する。

## 方法

**対象** 日本に在住している 20 歳～65 歳の成人を対象とした。調査会社 (Freeasy, アイブリッジ株式会社) に依頼し、400 名分 (男性 200 名、女性 200 名) のデータを収集した。性別により各年代 (20 代、30 代、40 代、50 代、60 代) の人数が同程度になるように調整した。参加者には Web 画面上で調査内容について説明し、参加の承諾を得た。調査は匿名で実施し、個人が特定可能な情報は収集しなかった。調査は 2 回に分けて実施した。調査 1 の実施期間は 2025 年 6 月 3 日～6 日、調査 2 は 2025 年 6 月 30 日～7 月 7 日であった。

**尺度の翻訳** ETA (Dias Martins et al. 2025) の原著者に許可を得た後に、著者が ETA の翻訳を行った。翻訳の際には類似の表現を含む IRI-J (日道他 2017) を参考にした。日本語に翻訳された各項目について、英文翻訳会社 (Editage, カクタス・コミュニケーションズ株式会社) に依頼し、英語への再翻訳、および原文と再翻訳の意味内容が等価であることの確認を行った。

**調査項目 (調査 1)** ETA-J の 10 項目 (EC6 項目、PT4 項目) について、5 段階による評定を求めた (1 全く当てはまらない、2 当てはまらない、3 どちらでもない、4 当てはまる、5 非常によく当てはまる)。

また、構成概念妥当性について検討するため、ヒト

に対する共感性を測定する IRI-J (日道他 2017) を実施した。IRI-J は共感的関心 (EC, 7 項目), 視点取得 (PT, 7 項目), 個人的苦痛 (PD, 7 項目), 想像性 (FS, 7 項目) の 28 項目から構成されている。ETA-J と IRI-J の EC・PT 得点間には正の相関が認められることが予想される。

さらに、基準関連妥当性検討のため動物 (犬, 猫, ウサギ, げっ歯類, その他哺乳類, 鳥類, 爬虫類・両生類, 魚類, 昆虫) の飼育経験の有無, 動物保護ボランティアへの参加経験の有無, 動物保護活動への寄付経験の有無, 捕獲された野犬および熊の殺処分に関する態度 (賛成, 反対, どちらでもない), 動物好きの程度 (非常に嫌い~非常に好きの 7 段階評定) に関する項目についての回答を求めた。ETA-J の得点が高いほど, 動物に関連した経験が豊富で, 動物の殺処分に否定的であり, 動物好きであることが予想される。デモグラフィック特性 (性別, 年齢, 居住地等) についても併せて回答を求めた。

**調査項目 (調査 2)** 再検査法による信頼性を確認するため, 調査 1 と同じ対象者に ETA-J を再実施した。それに加えて尺度の構成概念妥当性検討のため, 日本版擬人化尺度 (上出他 2017) および動物に対する態度類型 (石田他 2004) を実施した。

日本版擬人化尺度 (上出他 2017) は, 行為, 計画, 自己統制などを実行する能力である行為の主体 (Agency) と, 痛みや喜びなどの感情を経験できる能力である感覚の経験性 (Experience) からなり, 日本版では感覚の経験性が感情価によりポジティブ感覚の経験性とネガティブ感覚の経験性に分かれている。本来は写真に対して評定するものであるが, 本調査においては言葉 (犬, 人間, ロボット) のみを提示して評定を求めた。各単語に対して, 5 段階 (全く当てはまらない~非常に当てはまる) で回答した。動物に対する共感性が高ければ, 動物への擬人化尺度においても高得点となることが予想される。

動物に対する態度類型 (石田他 2004) は, Kellert の動物観に関する研究 (Kellert 1991) に基づき, 日本人の態度を類型化したものである (亀山他 1991; 亀山他 1992)。12 の態度類型について, 各 3 項目, 計 36 項目から構成されている。各項目について, 5 段階 (非常にそう思う~全然そう思わない) での評定を求めた。本調査では, 家族的態度 (ペットを家族同様に捉える), 倫理的態度 (動物を正しく, 平等に扱う), 支配的態度 (動物を支配・制御しようとする), 実用的態度 (人間の役立つことが優先される), 否定的態度 (動物に対して恐れや嫌悪を抱く), 無関心 (動物に特に関心を示さない) の 6 つの態度類型との関係について検討を行った。動物に対する共感性が高いほ

ど, 家族的態度や倫理的態度の得点が高く, 支配的態度, 実用的態度, 否定的態度, 無関心の得点が低くなることが予想される。

さらに, 回答の品質を確認するため「この項目は“まあそうだ”を選んでください」という質問項目を調査 1・2 とともに導入した。

**統計解析** 統計解析には HAD (version 18.0; 清水 2016) を用い, t 検定, 分散分析, 相関分析を実施した。分散分析における多重比較には Holm 法を用いた。また, 確認的因子分析は R (version 4.5.2; <https://www.r-project.org/>) および lavaan パッケージ (Version 0.6-17) を用いて実施した。

## 結果

調査 1 では 400 名分のデータを収集した。その内, 回答の品質確認のための項目で“まあそうだ”を選ばなかった者, ETA-J において全項目同じ回答番号を選んだ者 (119 名) は除外し, 残りの 281 名 (男性 143 名, 女性 138 名, 年齢 20 ~ 65 歳, 平均年齢 44.5 歳) のデータを分析対象とした。さらに, その 281 名に対して, 調査 2 の協力を依頼したところ, 268 名から回答を得ることができた。調査 1 と同様の基準で回答の品質が低い者 (36 名) を除外し, 残りの 236 名 (男性 114 名, 女性 122 名, 年齢 20 ~ 65 歳, 平均年齢 44.6 歳) を分析対象とした。

## 確認的因子分析

Dias Martins et al. (2025) の 2 因子モデルについて確認的因子分析を実施したが, 適合度は低かった (CFI = .893, RMSEA = .134, SRMR = .081)。適合度が低かった理由として, 逆転項目の因子負荷量の低さが影響している可能性が考えられた (項目番号 4 = .627, 項目番号 5 = .449, 項目番号 2 = .465)。IRI-J の作成 (日道ら 2017) においても同様の現象が確認されており, その対策として, 検討対象となる因子とは無相関な逆転項目のワーディング効果を方法因子として仮定した CTCM モデル (Correlated traits-correlated methods model; Eid 2000) による確認的因子分析が行われている。本研究においても, 方法因子を逆転項目に設定した CTCM モデルを用いて確認的因子分析を行った結果, 適合度は改善された (CFI = .983, RMSEA = .056, SRMR = .035)。ETA-J は, 先行研究と同様の 2 因子構造を維持しており, 因子妥当性が確認できた。ETA-J の各項目および因子負荷量を表 1 に示す。また, 各因子の基礎統計量を表 2 に示す。

## 信頼性の検討

内的整合性について検討するため, クロンバックの  $\alpha$  係数を算出した。その結果, EC ( $\alpha = .854$ ), PT

表1 確認的因子分析の結果 (n = 281)

項目 番号	項目内容	因子負荷量	
		下位因子	方法因子
共感的関心 ( $\alpha = .85$ )			
6	動物に起こった出来事に、心を強く動かされることが多い	.88	
1	不運な目にあった動物を心配し、気にかけることが多い	.87	
3	動物が人間に都合良く利用されているのを見ると、その動物を守りたい気持ちになる	.81	
4	* 動物が不運な目にあっても、それほど気にならない	.58	.66
5	* 動物が不当に扱われているのを見ても、そんなにかわいそうだと 思わないことがある	.39	.61
2	* 不運な目にあっている動物に対して、気の毒に思わないことがある	.42	.48
視点取得 ( $\alpha = .86$ )			
9	ペットのことをよく知ろうとして、彼らからどのように物事が見 えているか想像する	.84	
8	動物を叱る前には、自分がその動物の立場だったらどう感じるか 想像しようとする	.81	
11	ペットに腹が立ったときは、しばらく彼らの身になって考えるよ うにしている	.77	
12	助けが必要な動物を見ると、自分が同じ状況に置かれたらどんな 生活を送るのかと想像する	.72	

注) 項目番号は原版 (Dias Martins et al. 2025) に対応している。

\*逆転項目

( $\alpha = .860$ ) ともに高い値を示した。また、調査1と調査2の得点間の相関係数(ピアソンの積率相関係数)を算出したところ、EC ( $r = .84$ ,  $p < .01$ )、PT ( $r = .80$ ,  $p < .01$ ) となった。再検査法による信頼性についても十分に高いことが示された。

#### 構成概念妥当性(収束的妥当性)の検討

構成概念妥当性について検討するため、IRI-J、擬人化尺度、動物に対する態度類型との関係について分析を行った。各尺度の基礎統計量を表2に示す。

ETA-JとIRI-Jの各下位尺度得点間の相関分析を行った。その結果、EC ( $r = .640$ )とPT ( $r = .567$ )の相関係数は比較的高くなっていった。ただし、ETA-JとIRI-Jとは類似した文章表現を含んでいるため、相関係数が過剰に高くなっている可能性がある。

次に、擬人化尺度得点との相関係数を算出した(表3)。その結果、犬に対してはEC ( $r = .43-.44$ )、PT ( $r = .28-.40$ )ともに中程度の相関が認められた。人間に対しては相関が比較的弱く(EC:  $r = .27-.32$ , PT:  $r = .12-.27$ )、ロボットに対しては有意な相関が認められなかった(EC:  $r = .05-.11$ , PT:  $r = .02-.12$ )。人間やロボットよりも動物(犬)に対する擬人化とより強い関連性があることが確認された。

さらに動物に対する態度類型得点の相関係数を算出

した(表4)。家族的態度、倫理的態度とは中程度の正の相関(EC:  $r = .48-.50$ , PT:  $r = .41-.41$ )、実用的態度、否定的態度、無関心とは中程度の負の相関(EC:  $r = -.33-.51$ , PT:  $r = -.24-.56$ )が示され、予想された通りの関係性が認められた。ただし、支配的態度との関連性は弱かった(EC:  $r = -.21$ , PT:  $r = -.01$ )。

#### 基準関連妥当性(併存的妥当性)の検討

基準関連妥当性について検討するため、各項目における回答別の平均得点を算出した(表5)。動物の飼育経験による平均値の違いについて、t検定を実施した結果、EC ( $t(277) = 5.88$ ,  $p < .001$ ,  $d = .79$ )、PT ( $t(277) = 4.11$ ,  $p < .001$ ,  $d = .56$ )ともに、飼育経験があるほうが高くなっていた。動物保護ボランティアへの参加経験による違いについても同様にt検定を実施した結果、EC ( $t(279) = 0.61$ , n.s.,  $d = .13$ )では有意差は認められなかったが、PT ( $t(279) = 2.38$ ,  $p < .05$ ,  $d = .49$ )はボランティア経験があったほうが高くなっていた。動物保護活動への寄付経験による違いについては、EC ( $t(279) = 4.59$ ,  $p < .001$ ,  $d = .70$ )、PT ( $t(279) = 4.35$ ,  $p < .001$ ,  $d = .66$ )ともに、寄付経験があったほうが高くなっていた。

捕獲された野犬の殺処分に関する態度による違いに

表 2 各尺度得点の基礎統計量

尺度	下位尺度	平均値	標準偏差	範囲	
ETA-J (n=281)	共感的関心	3.48	0.79	1-5	
	視点取得	3.11	0.79	1-5	
IRI-J (n=236)	共感的関心	3.29	0.62	1-4.86	
	視点取得	3.10	0.59	1-4.57	
擬人化尺度 (n=236)	(対象：犬)	ポジティブ	3.64	0.68	1-5
		感覚の経験性			
		ネガティブ	4.05	0.72	1-5
		感覚の経験性			
	(対象：人間)	行為の主体	3.60	0.63	1-5
		ポジティブ			
		感覚の経験性	4.06	0.68	1-5
		ネガティブ			
	(対象：ロボット)	感覚の経験性	4.19	0.68	1-5
		行為の主体			
		ポジティブ	4.09	0.65	1-5
		感覚の経験性			
(対象：ロボット)	行為の主体	2.47	0.91	1-5	
	ポジティブ				
	感覚の経験性	2.28	0.95	1-5	
	ネガティブ				
動物に対する態度類型 (n=236)	行為の主体	3.06	0.89	1-5	
	家族的				
	倫理的	3.50	0.80	1-5	
	支配的				
実用的	3.43	0.75	1-5		
否定的					
無関心	3.08	0.77	1-5		

表 3 ETA-J と擬人化尺度得点との相関係数 (n = 236)

対象	下位尺度	ポジティブ	ネガティブ	行為の主体
		感覚の経験性	感覚の経験性	
犬	共感的関心	.43 **	.44 **	.43 **
	視点取得	.39 **	.28 **	.40 **
人間	共感的関心	.26 **	.27 **	.32 **
	視点取得	.15 *	.12	.17 **
ロボット	共感的関心	-.05	-.11	.10
	視点取得	.04	.02	.12

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ 

について1要因の分散分析を実施した結果、ECについては「賛成」「どちらでもない」と回答した者よりも、「反対」と回答した者において高く ( $F(2, 276) = 7.88$ ,  $p < .001$ ,  $\eta_p^2 = .05$ ), PTについては「賛成」と回答した者よりも、「反対」と回答した者において高くなっていた ( $F(2, 276) = 4.39$ ,  $p < .05$ ,  $\eta_p^2 = .03$ )。捕獲された熊の殺処分に関する態度による違いについても同様に分散分析を実施した結果、EC・PTとも

に「賛成」「どちらでもない」と回答した者よりも「反対」と回答した者において高く、「賛成」と回答した者よりも「どちらでもない」と回答した者において高くなっていた (EC:  $F(2, 276) = 27.23$ ,  $p < .001$ ,  $\eta_p^2 = .17$ ; PT:  $F(2, 276) = 14.84$ ,  $p < .001$ ,  $\eta_p^2 = .10$ )。

動物好きの程度との相関係数は、EC ( $r = .58$ ,  $p < .01$ ), PT ( $r = .47$ ,  $p < .01$ ) とともに、中程度の

表 4 ETA-J と動物に対する態度類型得点との相関係数 (n = 236)

下位尺度	態度類型					
	家族的	倫理的	支配的	実用的	否定的	無関心
共感的関心	.50 **	.48 **	-.21 *	-.49 **	-.33 **	-.51 **
視点取得	.41 **	.41 **	-.01	-.37 **	-.24 **	-.56 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

表 5 各項目への回答別の平均得点 (標準偏差)

下位尺度	動物の飼育経験		
	有 (n=74)	無 (n=205)	
共感的関心	3.63 (0.74)	3.04 (0.76)	
視点取得	3.07 (0.84)	2.59 (0.91)	
下位尺度	動物保護ボランティアへの参加経験		
	有 (n=26)	無 (n=255)	
共感的関心	3.57 (0.77)	3.41 (0.80)	
視点取得	3.34 (0.86)	2.91 (0.88)	
下位尺度	動物保護活動への寄付経験		
	有 (n=54)	無 (n=227)	
共感的関心	3.91 (0.75)	3.38 (0.77)	
視点取得	3.40 (0.86)	2.84 (0.86)	
下位尺度	捕獲された野犬の殺処分		
	賛成 (n=94)	どちらでもない (n=140)	反対 (n=45)
	共感的関心	3.31 (0.75)	3.46 (0.74)
視点取得	2.80 (0.84)	2.93 (0.85)	3.27 (0.98)
下位尺度	捕獲された熊の殺処分		
	賛成 (n=41)	どちらでもない (n=156)	反対 (n=82)
	共感的関心	3.03 (0.82)	3.35 (0.69)
視点取得	2.51 (0.84)	2.85 (0.81)	3.33 (0.90)

相関が認められた。動物が好きであるほど、EC、PTの得点が高くなる傾向があった。

#### 下位尺度の平均得点と性別・年齢との関係

ETA-Jの平均得点を性別ごとに算出した(表6)。平均得点について性別×下位尺度の2要因分散分析を実施した結果、性別および下位尺度の主効果が有意であった(性別:  $F(1,277) = 33.15, p < .001, \eta_p^2 = .11$ ; 下位尺度:  $F(1,277) = 175.31, p < .001, \eta_p^2 = .39$ )。ETA-Jの得点は男性より女性で高く、PTよりもECにおいて高くなっていた。

対象者の年齢との相関関係は認められなかった(EC:  $r = .10, n.s.$ ; PT:  $r = -.04, n.s.$ )。一方で、ECとPTの得点間には比較的高い相関が認められた( $r = .68, p < .01$ )。

表 6 性別ごとの平均得点 (標準偏差)

下位尺度	男性(n=143)	女性(n=138)
共感的関心	3.22 (0.76)	3.74 (0.74)
視点取得	2.71 (0.87)	3.19 (0.83)

#### 考察

本研究は、Dias Martins et al. (2025) により作成されたETAの日本語版(ETA-J)を作成し、その信頼性および妥当性を検討することを目的とした。その結果、原版と同様に共感的関心(EC)と視点取得(PT)の2因子構造が確認された。逆転項目の影響を考慮し方法因子を導入したCTCMモデルを適用することで適合度は十分な水準に改善され、因子妥当性が支持された。また、内的整合性および再検査信頼性は

いずれも高い値を示した。さらに、IRI-J、擬人化尺度、動物に対する態度類型、飼育経験や寄付経験、殺処分に対する態度などとの関連も概ね仮説と一致しており、構成概念妥当性（収束的妥当性）および基準関連妥当性（併存的妥当性）が確認された。以上より、ETA-Jは日本語環境において動物への共感性を多面的に測定可能な尺度であると考えられる。

本研究においてECとPTの2因子構造が再現されたことは、共感を感情的側面と認知的側面から捉える多次元的枠組みと整合的であり（Davis 1983; 登張 2000）、動物を対象とした場合においても、両側面が区別可能な構成概念として機能していることが示された。一方で、ECとPTの間には比較的高い相関関係（ $r = .68$ ）が認められた。IRI-J（日道他 2017）においても、同程度の相関が認められており、共感性の感情的側面と認知的側面は独自の構造を持ちながらも、機能的に強く結びついている可能性が示唆される。

一方、逆転項目の因子負荷量が相対的に低く、単純な2因子モデルでは適合度が十分でなかった。この傾向は他の英語版心理尺度を日本語化する際にも報告されており（日道他 2017; 高野他 2021）、日本語と英語の逆転項目のワーディングの違いが影響している可能性がある（日道他 2017）。CTCMモデルにより逆転項目の方法効果を統制した場合に2因子構造が支持されたが、逆転項目の扱いには留意する必要がある。ECの全項目を用いた6項目版と、逆転項目を除いた3項目版について比較検討したところ、平均値は6項目版3.48（SD 0.79）、3項目版3.22（SD 0.95）であり、両者の相関係数は $r = .887$ であった。また、 $\alpha$ 係数は6項目版 $\alpha = .854$ 、3項目版 $\alpha = .887$ 、IRI-JのEC得点との相関係数は6項目版 $r = .640$ 、3項目版 $r = .546$ となった。6項目版と3項目版とで顕著な違いが認められないことから、本稿では原版ETAとの対応性および内容的妥当性を重視し、6項目版を採用することとした。

ETA-JとIRI-JのECおよびPTとの得点間には比較的高い相関が認められた。この結果は、ヒトへの共感性と動物への共感性との間に一定の関係性があることを示しており、両者は同一の概念ではないものの関連していると考えられる（Paul 2000）。さらに、擬人化尺度との関連において、犬に対する擬人化との相関が最も強く、人間では弱まり、ロボットでは有意な関連が認められなかった。このパターンは、ETA-Jが単なる一般的な共感傾向ではなく、生物性や関係性を伴う対象に特異的な共感性を測定している可能性を示唆する。また、家族的態度・倫理的態度との正の相関、実用的態度・否定的態度・無関心との負の相関という結果は、ETA-J得点が動物に対する価値観や態

度と整合的に関連していることを示している。これらの結果は、ETA-Jが動物福祉や動物保護意識に関連する心理特性を適切に捉えていることを支持する。

本研究では、女性が男性よりもECおよびPTの得点が高かった。これまでの動物を対象とした共感性尺度においても一貫して性差が認められており、男性よりも女性のほうが得点は高くなっている（Paul 2000; Powell 2010; Dias Martins et al. 2025）。社会心理学的手法を用いたヒトへの共感性研究においても女性の方が情動的共感が高い傾向が報告されており（Edele et al. 2013; Kamas and Preston 2021）、本研究の結果は共感性に関する一般的傾向が動物対象にも及ぶ可能性を示している。一方で、共感性の得点と年齢との有意な関連は認められておらず、動物への共感性が成人期において比較的安定した特性である可能性を示唆する。ただし、縦断的検討は行われていないため、発達的变化については今後の課題である。

ETA-Jは、動物介入介入における参加者特性の評価や、介入効果の測定指標として活用可能であると考えられる。動物との関係構築を基盤とする教育的・治療的実践において、動物への共感性は重要な媒介要因となる可能性がある。また、動物福祉教育やヒューメインエデュケーションの効果測定指標としても利用可能である。さらに、保護された動物の殺処分に対する態度や動物保護活動経験との関連が示されたことから、社会的意思決定や政策的議論に関わる心理的要因の把握にも応用できる可能性がある。

本研究にはいくつかの制限がある。第一に、Web調査および自己報告法によるデータであり、社会的望ましきバイアスの影響を受けている可能性がある。第二に、翻訳過程においてIRI-Jの表現を参照したため、IRI-Jとの相関が部分的に文章表現の類似性に依存している可能性がある。第三に、動物種を特定しない尺度構成であるため、伴侶動物や野生動物など対象カテゴリー間の差異は十分に検討されていない。今後は、行動指標との関連検証、縦断研究による安定性の検討、動物種別の共感性差の分析、臨床・教育現場での実践的検証などが求められる。

本研究の結果から、ETA-Jは原版ETAと同様の2因子構造を有し、十分な信頼性および妥当性を備えた尺度であることが示された。本尺度は、日本語環境におけるヒトと動物の関係に関する研究基盤を提供し、動物介入介入や動物福祉教育の実践に資する効果測定ツールとなることが期待される。

## 利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

## 文 献

- Davis MH. 1983. Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(1), 113-126.
- Dias Martins C, Vergara RC, Khoury B. 2025. Internal and external validation of the empathy toward animals scale. *Anthrozoös*, 38(1), 131-152.
- Edele A, Dziobe I, Keller M. 2013. Explaining altruistic sharing in the dictator game: The role of affective empathy, cognitive empathy, and justice sensitivity. *Learning and Individual Differences*, 24, 96-102.
- Faner JMV, Dalangin EAR, De Leon LATC, Francisco LD, Sahagun YO, Acoba EF. 2024. Pet attachment and prosocial attitude toward humans: the mediating role of empathy to animals. *Frontiers in Psychology*, 15, 1391606.
- Herzog HA Jr, Betchart NS, Pittman RB. 1991. Gender, sex role orientation, and attitudes toward animals. *Anthrozoös*, 4(3), 184-191.
- 日道俊之, 小山内秀和, 後藤崇志, 藤田弥世, 河村悠太, Davis MH, 野村理朗. 2017. 日本語版対人反応性指標の作成. *心理学研究*, 88(1), 61-71.
- 石田戢, 横山章光, 上条雅子, 赤見朋晃, 赤見理恵, 若生謙二. 2004. 日本人の動物観—この10年間の推移—. *動物観研究*, 8, 17-32.
- Kamas L, Preston A. 2021. Empathy, gender, and prosocial behavior. *Journal of Behavioral and Experimental Economics*, 92(101654), 101654.
- 亀山章, 石田戢, 若生謙二, 高柳敦. 1991. 日本人の動物に対する態度の類型化について. *動物観研究*, 2, 8-13.
- 亀山章, 石田戢, 高柳敦, 若生謙二. 1992. 日本人の動物に対する態度の特性について. *動物観研究*, 3, 1-24.
- 上出寛子, 高嶋和毅, 新井健生. 2017. 日本語版擬人化尺度の作成. *パーソナリティ研究*, 25(3), 218-225.
- Kellert SR. 1991. Japanese perceptions of wildlife. *Conservation Biology*, 5(3), 297-308.
- Mehrabian A, Epstein N. 1972. A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40(4), 525-543.
- Paul ES. 2000. Empathy with animals and with humans: Are they linked? *Anthrozoös*, 13(4), 194-202.
- Powell GM. 2010. *The role of individual differences and involvement on attitudes toward animal welfare* [Master's thesis]. Kansas State University.
- 清水裕士. 2016. フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73.
- Smith P, Mann J, Marsh A. 2024. Empathy for wildlife: The importance of the individual. *Ambio*, 53(9), 1269-1280.
- Swim JK, Guerriero JG, Lengieza ML, Cameron CD. 2023. The effects of stereotypes about animals' competence and warmth on empathy choice. *Anthrozoös*, 1-17.
- 高野了太, 高史明, 野村理朗. 2021. 日本語版右翼権威主義尺度の作成. *心理学研究*, 91(6), 398-408.
- 登張真穂. 2000. 多次元的視点に基づく共感性研究の展望. *性格心理学研究*, 9(1), 36-51.

## 日本語版動物への共感性尺度の作成

野瀬 出

日本獣医生命科学大学 比較発達心理学分野

(2026年3月3日受付 / 2026年5月12日受理)

**要約** : Dias Martins et al. (2025) が作成した動物への共感性尺度 (Empathy Toward Animals scale: ETA) は, 動物に向けられた共感性の2側面 (共感的関心, 視点取得) を測定する尺度である。本研究では, ETA の日本語版 (ETA-J) を作成し, その信頼性および妥当性を検討することを目的とした。対象は日本在住の20歳から65歳までの成人であり, オンライン調査を実施した。ETA-Jに加えて, 対人反応性指標, 動物に対する態度類型, 擬人化尺度, 動物の飼育経験, 動物ボランティアへの参加経験, 動物保護活動への寄付経験, 捕獲された野犬や熊の殺処分に対する態度, ならびに動物好きの程度について回答を求めた。確認的因子分析の結果, 先行研究と同様の2因子構造が支持された。再検査信頼性, 構成概念妥当性および基準関連妥当性についても十分であることが確認された。動物福祉に配慮しつつ動物と相互作用を行う動物介在介入を実施する際の参加者の適性判断や効果測定のための指標として, ETA-J が活用できると考えられる。

**キーワード** : 動物への共感性, 心理尺度, 信頼性, 妥当性